味と匂い研究会2015年度活動報告

岩　﨑　陽　子

０．2015年活動概要

当研究会は、五感の中でも比較的先行研究の乏しい「味覚」と「嗅覚」を取り上げ、それらの特性を検証した上で、感覚による世界認識の新たな在り方を、アート・デザインのかたちで提言することを目的として2012年４月に設立された。

現メンバーは京都嵯峨芸術大学の教員である真板昭夫（観光デザイン）、坂田岳彦（デザイン）、岩﨑陽子（哲学・美学）が中心となり、かつ学外からも井上健司（株式会社松栄堂）、井上貴元（味香り戦略研究所）各氏を加えた構成員から成る。

前年2014年度は、京都市営地下鉄主宰の駅ナカアート2014での香りのアート出展、フランスのパリ第一大学のKODOプロジェクトにおける国際会議発表、イタリア・フランスへの海外調査実施、健光園における「匂いによるユニバーサルデザイン」の作品制作、2015年３月に開催された京都国際現代芸術祭PARASOPHIAに併せて開催する匂いアートプロジェクト「パリ・ボザール学生との香りアート交流」企画・準備など、香り・匂いに関わる多彩な研究活動を精力的に実施した。

今年度は、本研究会のメンバーで獲得した科研のテーマでもある、『匂いによるユニバーサルデザイン』研究の３年間にわたる研究の最終年度であった。これまで実施したプロジェクトを、科研最終年度の総まとめとして位置づけ、外部にも様々なかたちで成果報告していくことを目標とした一年であった。

また前年度にも増して海外との連携を強化し、学生交流や講演会など、特にフランス・パリでの活動を精力的に行った。その最中の2015年１月、そして11月にもパリでイスラム国によるテロがあり、プロジェクト自体の存続も含めて危機を感じることは多々あった。しかしながら、多くの方々の援助と期待を受けて計画通りにプロジェクトを実施することができた。

今年度の主な成果を挙げる。

①Perfume Art Project @Kyoto
②健光園における「匂いによるユニバーサルデザイン」の作品制作、スタッフアンケート実施
③学会成果発表（坂田・岩﨑）・講演会実施
④Perfume Art Project @Paris
⑤香りのアート展覧会「黒髪とマドレーヌ」開催

以下順に上記５点について詳述する。

１．Perfume Art Project @Kyoto

香りのアート理論構築に資するための活動として、京都とパリで学生交流を実施した。パリ・ボザールの川俣正ゼミの学生11人を招き、京都嵯峨芸術大学の学生25人と共に香りのアートの共同制作を実施した。また、この成果を京都市内５か所に展示した。

これら一連の活動の詳細に関しては、本紀要内の研究活動報告の中で報告を行っている。（岩﨑陽子「香りのアート／日仏学生交流　―京都とパリ」51～54頁）

２．健光園における「匂いによるユニバーサルデザイン」の作品制作、スタッフアンケート実施

2013年度に行った、香りと記憶に関わるアンケート調査の結果を用いて、本学向かいに位置する高齢

者施設・健光園における入居者とスタッフのために「匂いによるユニバーサルデザイン」を構想し、それに何が必要かを考察してきたが、本年、ようやくその一つのモデルとして「モビール」に注目するに至った。その理由について以下に簡単にまとめる。

テーマがUD（ユニバーサルデザイン、以下UDと表記）なので、幅広い年齢層に受け入れられやすい（そして幼稚すぎずに高度すぎない中間の）造形物を模索した結果のオブジェであった。モビールは大人のための見栄えのするものは数万円するものがあり、子供向きの安易なものから、かなり造形的に凝って作ることも可能である。

匂いの仕掛けについて、いつも問題になるのがメンテナンスであった 。電源が必要なものは入り切りに毎日手を取られるので、結局使わなくなる。その点、モビールは風を受けるものであり、必然的に香りを電源なしにゆるくまき散らすことのできるすぐれた装置になり替わる。

また今回は施設入居者の中の「寝たきり」の方も想定した。造形物は普通、座るか立つかして鑑賞する。でもモビールは寝たきりの人でも、寝たまま見ることができる。動きのない天井に、微風でもゆらぐモビールがゆれることによって、日常生活にアクセントがつかないか、という狙いである（裏目に出て、視界にユラユラうるさい、ということも考えられるが）。その上匂いが風向きによって漂ってくれば、寝たきりの方に良い刺激にならないか、ということも考えた。

また本来の目論見では、モビールに使う 材料を入所者の人と学生が交流しながら揃えていく（一緒に散歩で川に流木を拾いに行くなど）といった案もあったが、今回は実施がちょうど梅雨ということで、気候がよくないのでその部分は割愛した。

モビール作成にあたって、最初に学生有志によってモビールの造形案を数パターン提出してもらい、それを健光園の方々に選定していただいた。その上で、学生が選定された２パターンのモビールを作成、実際に入所者の居室とデイ・サービスの部屋にも２週間程度設置した。

このモビール設置前後の居室居住者の反応について、常駐の施設スタッフにアンケートを実施し、その結果を集計した。

この総合的な成果の詳細については坂田岳彦が意匠学会にてパネル発表を実施した。本紀要内でその報告がなされている（坂田岳彦「香りによるユニバーサルデザインを考える」33～38頁参照）

また学内でもこの件についての研究会を開催し、成果を公表した。

３．学会成果発表（坂田・岩﨑）・講演会

３年間の科研研究『匂いと味によるユニバーサルデザイン』の締めくくりの年度を意識し、対外的な成果報告と、講演会による知見公表を積極的に実施した。

成果発表としては、坂田岳彦と岩﨑陽子はそれぞれ学会にて成果発表を行った。前述のように坂田岳彦は2015年７月26日の意匠学会で「香りのUDを考える」という題でパネル発表を行った。これは健光園でのモビール制作について成果報告を行ったものであった。岩﨑陽子も岐阜で開催された日本味と匂い学会にて*A report on an investigation and study of the memories with the smell of the aged: from a point of view of the universal design by the smell*と題して英語のポスター発表を行った。これは2013年度に実施した健光園での「香りと記憶」のアンケート結果について分析したもので、研究者を始めとして企業の方や一般の来聴者にも多く質問を受けた。

また、本研究の導入した知見を広く普及することを目的とし、一般にも公開する形式で、2015年12月18日、19日の２日間にわたって、香りの展覧会のために来日していたフランスの匂いの造形作家Boris RAUXと石垣島在住の香りアーティストのMaki UEDAによる「香りについて考える」と題した講演会を、本学と同志社大学で行った。彼らの香りアートの取り組みやその基本となる匂いについての考え方は、香りと空間の在り方について深く考えるきっかけとなった。これには本学の学生だけではなく、外部の企業や一般の人々の聴講があり、活発な質疑応答が展開された。

４．Perfume Art Project @Paris

春の香りのアート学生交流に引き続き、今度は京都嵯峨芸術大学の学生がパリに出向き、現地で制作を行って展覧会を開催するという研究会主催の海外研修も実施した。（笹川日仏財団の協賛）岩﨑が本学の学生5人を連れ、10月末から11月初旬にパリのBoris RAUXの自宅に滞在して制作と展示の準備を行い、最終的にはボザールの学生と共にパリ国際大学都市日本館でForme d'Odeur展という交流展覧会を行った。

これら一連の活動の詳細に関しては、本紀要内の研究活動報告の中で報告を行っている。（岩﨑陽

子「香りのアート／日仏学生交流　―京都とパリ」51～54頁）

５．香りのアート展覧会「黒髪とマドレーヌ」開催

本展覧会では、国際的な香りのフランス人アーティスト、Boris RAUX（ボリス・ロ）と石垣島在住の香りアーティストMaki UEDAを招き、岩﨑陽子によるキュレーションで京都を舞台に香りの芸術交流を実施した。（三人は、パリでの嗅覚創造に関する講演会「香り芸術の美学」、パリ日本文化会館、2015年５月９日で直接出会い、香りをテーマとした日仏交流の可能性を探ってきた）。

三人の対話や制作を通じて日仏の香りや匂いに対する感覚の差異や共通項を切り出しつつ、嗅覚アートの可能性を探究した。

【展覧会概要】

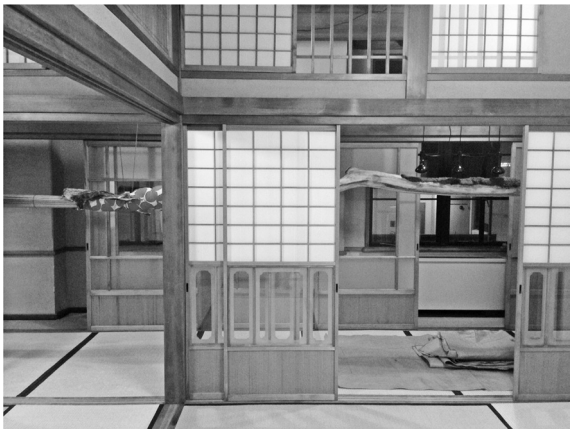
黒髪とマドレーヌ展
香りのアート　京都×Paris

Boris RAUX　Maki UEDA
Curator　Yoko IWASAKI

2015年12月19日（土）－12月27日（日）
京都芸術センター　４階和室「明倫」

共催：京都芸術センター
協力：東山アーティスツ・プレイスメント・サービス（HAPS）、常松庵

この展覧会は世界でも特に香り／匂いに敏感で、洗練された文化を育んできた日本とフランスの二人の現代アーティストを京都芸術センターに招いて実施した展覧会であった。

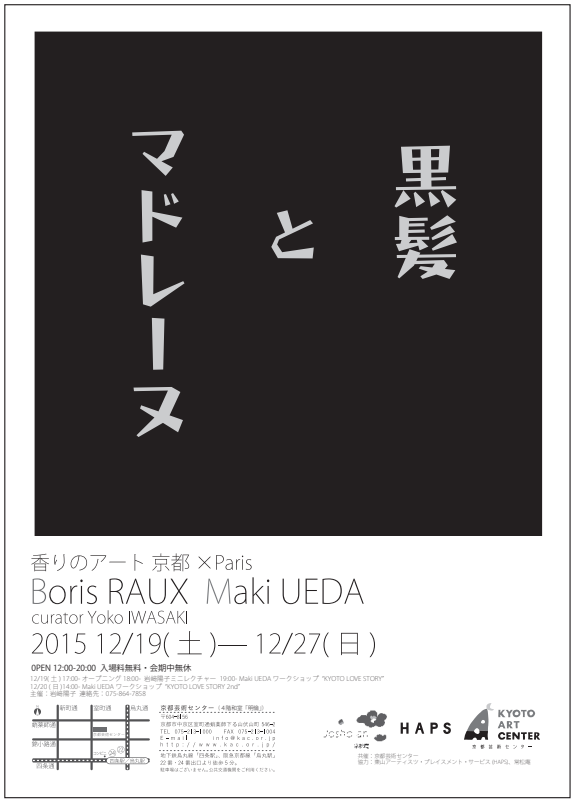


Boris RAUX《Acheval entreles modes, 2015》

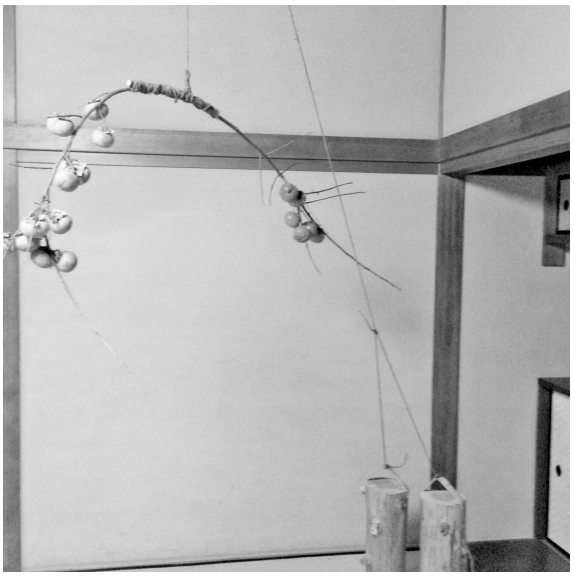
Boris RAUXは匂いと社会との問題に10年近く前から取り組み、匂いを使ったインスタレーション作品を発表してきた。彼は2015年の年明けから３か月間、フランスの香りの街・グラースの国際香料博物館で個展を終えたばかりであり、今現在注目の嗅覚アーティストである。今回、初来日が実現し、2015年12月１日にパリから直接京都に入って、京都の匂いをリサーチした。彼は京都の街を歩きながら、地元の人なら気にも留めなかったものに興味を示して「これは何か、何に使うのか」と聞いて嗅いでいたが、その好奇心が京都芸術センターの和室という特殊な空間をうまく取り込んだ作品制作につながった。また　彼は大変京都が気に入り、これから数年にわたって幾つかのステップで京都の街を嗅覚アートで表現していく予定を計画し、今回の展覧会はその第一歩であった。

Maki UEDAはオランダと石垣島在住の、同じく嗅覚アーティストである。彼女は自分自身で香りを抽出して作品に使うことが出来る稀有な才能の持ち主で、香りを使ったインスタレーションだけではなくワークショップも多く行い、その発想力の豊かさと匂いに対する洞察の深さは他の追随を許さない素晴らしいものである。

今回はBorisが京都に来ることを意識し、あえて



《展覧会フライヤー》



Boris RAUX《L'arbre perché》

Maki UEDA《KYOTO LOVE STORYより》

フランス的な感性にぶつけるもの、そしてまた香道発祥の地、京都を深く感じさせるものとして『源氏物語』を作品テーマに選んで「KYOTO LOVE STORY」というワークショップを企画した。香りの儚さを体現するために、Borisとは対照的に、あえて物としての作品作りではなく、「今・ここ」にある雅やかな世界観を楽しむ空間制作の仕掛けを行ったのである。

この展覧会は、これまでの香りとアートやデザインを考える上での様々な知見や技術のある種の集大成となるようなものであった。１週間ほどの展示であったが、京都芸術センター内であったことから多くの鑑賞者に恵まれ、盛況のうちに閉会した。

６．味と匂い研究会、今後の展望

以上のように、2015年度の味と匂い研究会は、本学の四大・短大・専攻科・院生といったすべての領域の学生を巻き込みながら、昨年度に引き続き活動の場を海外に広げ、精力的に研究活動をすすめることができた。また、科研の取り組みの集大成として学会発表や、出版（岩﨑陽子監訳、シャンタル・ジャケ著『匂いの哲学』晃洋書房、2015年８月）も叶い、充実した一年となった。

しかしながらやはりこうした活動を通じて痛感するのは、世界においても日本においても香りへの関心は高いものの、まだまだそれが芸術へと結びついていることは極めて稀であること、その意識すら稀薄であることであった。また芸術だけではなく、それを医療や介護の現場に取り込むことも未だ先端研究的な取り組みであり、先行研究例が極端に少ないということであった。

そのために研究が思うように進まなかったり、基礎研究や知見導入にかなりの時間と労力を割いたりする必要性があった。特に匂いについてはかなりの研究成果が出せたが、味についてはそれに付随するかたちでしかまだ研究が進んでいないことが今後の課題として挙げられる。

しかしながら先行研究の少なさについては、裏を返せば今後の発展が大きく見込める領域だということでもあり、日本だけではなく世界に点在する、香りをアート・デザインに取り込もうと奮闘している同志たちと連携を取りながら、引き続き来年度も活発に活動していく予定である。